

エゼキエル書講解 (I)

山崎 亨

序 論

エゼキエル書は三大預言書の一であり、預言書の代表的なものと考えられるが、其内容に於ては著しく他の預言書と趣を異にしている。イザヤ書に現われている如くに、國內政治を正道にのせようとする努力、外交政策を轉換して神の御意に従順なる路に進めるための熱辯は、エゼキエル書には見出されない。又神の審判に會い、破壊に陥らんとする民族の悲運を哀しむエレミヤの繊細な感情は、エゼキエル書に於て讀みとる事は出来ない。本書の著しい特徴は、祭司的な形式主義と、默示文學的象徴が預言の敘述と結び付いている點にある。本書に於ける祭司的要素は、後に形成されたユダヤ教に大なる影響を與えたのであつて、預言者エゼキエルを目して、「ユダヤ教の父」と稱している、ユダヤ教ラビ達の見方は、或意味に於て妥當である。

エゼキエル書講解 (I)

併し本書の全體的構造を俯瞰するならば、イザヤ書のそれと相似の點がある。本書の一章—二四章はユダとイスラエルに對する譴責の言であり、之はイザヤ書一章—一二章に記された處、本書二五章—三三章は異邦諸民族に對する神の審判を敘述しているが、之はイザヤ書一三章—二七章の内容を成し、本書の三三章—四八章に見出されるイスラエルの未來に現はる可き榮光は、イザヤ書二八章—六〇章にも見出される。

而し乍ら斯る比較は、極めて皮相的なものであつて、若し深く内容に立ち入るならば、看過する事の出来ない相異を見出す。

エゼキエル書研究の歴史

エゼキエル書には、可成順序を追うて、明確な年代が提示されている。例へば一・二〇「エユニヤ王の捕えゆ

かれしより第五年のその月の五日」が預言開始の時期を示し、(之と一・一の「第三十年四月の五日」との關連に就いては後述する)、現在のイスラエル史の計算に依れば、之が五九三年に當る事は、殆んど確實である。三・六には「七日すぎし後」とあり、八・一には「六年の六月五日」と記されていて、之も「エコニヤの捕えゆかれしより」の計算である事も容易に想像される。更に記述の進むにつれて、二〇・一には「七年の五月十日」、二四・一に於ける「九年十月十日」、二六・一「十一年の月の初めの日」、更に二九・一、二九・一七、三〇・二〇、三一・一、三二・一、三三・一七、三三・二一、四〇・一と預言された年代が明示されている。之を其儘に承認すれば、此の書程、年代探索に勞を要せぬ書は、他に比類を見ない。實に之が原因となつて、本書に對する批評學的研究は、永い間等閑に附せられていた。

過去に於ける幾多の批判的研究書を、回顧するならば、大體に二つに分裂する事が出来る。その一は、本書の全體としての統一を認め、前記の年代序述を單なる偽古文的技巧とし、エゼキエル書全體の年代を遙か後に移す。例へばペルシヤ時代、又はギリシヤ時代の初期とする。

その他は、本書の全體的统一を否定して、或部分を存四

時代に活動した預言者エゼキエルの筆に依るものと爲し、他の部分を編纂者の加筆として、後期の作とする。

本書に對する批判を順序に従つて敘述するならば、先づスピノザ (Spinoza) の *Tractus theologico-politicus*, 1670 から始めなければならぬ。彼は本書の統一性に對して疑を懷いたが、更に十八世紀に入つて、エーダーとフオーゲル (Oeder und Vogel) 共著の *Freye Untersuchungen*, 1771, ss. 341—88 には "Von den letzten 9 Kapiteln Ezechiels" の章に於て、エゼキエルの終りの九章が預言者の原著に對する附加である事、而かも此附加は、ヨセフスの臆測したところの、エゼキエルの作に依る二書中の「失はれたる書」の一部であるとの假説を發表した。十八世紀の終りに *Monthly Magazine and the British Register*, 1798 pp. 189—90 に於て *Concerning the Author of Some Poems Ascribed to Ezekiel*, なる論文は、エゼキエル書中、一一二四を二五—三三章から分離した。而かも、二五—三三、三五、三八—三九の諸章は、同一著者の筆であり、其著者は、エゼキエル二八・三を根據として、ダニエルであると論斷した。此の結論は正確なものであるとは言いがたないが、當時としては可成思ひ切つた議論であつたと思

はれる。

第十九世紀に入つてから後には、エゼキエル書に關する論文が數多く世に出たが、最初に特筆すべきものとしては、ツンツの (Zunz) の *Die gottesdienstlichen Vorträgen der Juden*, Berlin, 1832, ss. 157—62 を挙げなければならぬ。此書はエゼキエル書の統一性を肯定しつつ、其全體を従來の定説よりも後の時代の作となし、之をベルシヤ時代の作であると看做したが、之は要するに、本書を預言者エゼキエルの作でないと結論した事と成つた。併しツンツの斯る結論に至るまでの根據は今日の我等から見ると、薄弱なものであつた事を認めざるを得ない。例へばエゼキエル書の語學的特徴の一としてエレミヤ記との共通點を擧げてゐるが、之は寧ろ兩書の時代的接近をこそ裏付けるもので、前述の如き歸結に導くものとしては役立たない。又所謂 D との共通點の如きも、成程 D なる歴史家の一派は、可成後世まで續いて列王紀編纂にも與つたのであるが、然るに他面申命記及びその追加の部との關連に於て六〇〇年前後にも既に存在した申命記的改革派に屬する者と考ふる事も出来る。エゼキエル書と D との共通點は、同書が預言者の風格と祭司的戒律的傾向を兼ね具えてゐる事實を説明する場合

エゼキエル書講解(一)

に大いに有利であり、此預言者の性格を理解する一助にこそなれ、時代決定には、最後の根據として取り上げる事は出来ないと考ふる。

尙エゼキエル書の統一を認めながら、全體の年代を後期に置く主張は、Seinecke, *Geschichte des Volkes Israel*, 2 Bd, 1884, にも見受けられる。ザイネッケはエゼキエル書を紀元前二百年頃の作として、通説より約四百年も後の時代に置いた。

斯るエゼキエル書の統一を承認して立論した研究家に對して、之を否定して原著作と追加の部の區別に研究の努力を集中した人々が現れた。それは十九世紀の半頃に於て世に出た Ferdinand Hitzig, *Der Prophet Ezechiel erklärt*, Kurtzfaßtes exegetisches Handbuch zum A. T., Leipzig, 1847, 及びその終り頃公にされた Alfred Bertholet, *Das Buch Hezekiel erklärt*, Kurtzer Hand Commentar zum A. T., Tübingen, 1897, であつたが、更に一層批評學的な作はクレッチマー (Richard Kraetzschmar) の *Das Buch Ezechiel übersetzt und erklärt*, Handcommentar zum A. T., Göttingen, 1900 であつた。クレッチマーはエゼキエル書の全體を通じて重複記事として二十三箇處を指摘し、第一

人稱を以てエゼキエルを指す箇處と、第三人稱を以てするものとの差に依つて編輯者の加筆と原作との區別を立てた。彼の説に賛同した學者の中で、最も顯著であつたのはブッテであつた (K. Budde, *Geschichte der alt-hebräischen Literatur*, 1906, S. 150)。

重複記事の問題はシニミットに依つて再び取り上げられたが (Hans Schmidt, *Die grossen Propheten, Die Schriften des A. T., I Bd., Göttingen, 1915*)、最も明確に此問題を論じたのはヘルシャーであつた (Hölscher, *Hesekiel, der Dichter und das Buch*, *Beih. Z. A. W.* 39, Giessen, 1924)。彼はトゥームがエレミヤ記の分類に用いたと同一方法を踏襲した。彼はエゼキエル書中十六篇の優秀なる詩と五の散文體中の簡單な部分のみ原作と看做し一五、八一九、一一、一五一一七、一九、二一、二二—二四、二七—三二の章中に見出されるところの百七十節のみ原作と認め、他の節はレビ記的編輯者の筆に依るものであつて前五〇〇年から前四五〇年の間に記されたものであると論斷してゐる。

然るに其後エゼキエル書の統一を認め乍ら、その全體を後世に置きエゼキエル書を偽典とする説が現れた。之はアメリカの學者バロース (Millar Burrows) であつ

て *Literary Relations of Ezekiel*, New Haven, 1925 なる書に於てエゼキエル書と他の書との關係を考察し、特に申命記三二・二五とエゼキエル七・一五の類似、エゼキエル二四・一及び四・二と列王紀下二五・一との比較等をなしたが、結論としては、エゼキエル書が列王紀上下、イザヤ書十四章、モーセ五書の完結、等の年代よりも後に書かれたものであり、ハガイ、ゼカリヤ、オバデヤ、イザヤ一三、二三、二四、三四、四〇—四五、五六—六六、よりも後に記されたものとし、ヨエル、及びダニエルのアラム語の部分、ゼカリヤ九・一一—一二、三よりも後に記述されたと爲し、エゼキエル書は *Pseudo-epigraphon* であると斷定した。又「エゼキエル書はマッカビー時代直前に書かれたものである」と記した (上掲書二〇二頁)。

其後トローレーが現はれてエゼキエル書と預言者エゼキエルとの關係を論じて、本書を *Pseudo-Ezekiel* と稱するに至つた (Torrey, *Pseudo-Ezekiel and the Original Prophecy*, 1930)。トローレーは既に *Ezra Studies*, 1910, p. 288 の註に於て「エゼキエル書はギリシヤ時代に書かれた偽作である」と記している。トローレーの斯る結論は、エゼキエル書から數箇處の加筆を除けば首尾一貫

せる書と成るとの統一性の承認から出發している (Pseudo-Ezekiel, p. 112)。エゼキエル書の統一性を認め乍ら結論に於ては、本書を可成前期に置く説はスミスに依つて主唱せられた。James Smith, *The Book of the Prophet Ezekiel, A New Interpretation*, 1931 に於ては、エゼキエル書に現はれた異教的禮拜に關する記事は申命記改革以前の記述であると論ぜられてゐる (pp. 18—20)。而して本書の著者はマナセ王の治世中にパレスチナに於て預言した (バビロニヤに非ず) と結論を下している。此の議論は餘り人々の賛同を得るには至らなかつたが I. G. Matthews, *Ezekiel, American Commentary on the O. T. Philadelphia, 1939* に大なる影響を與えた。

エゼキエル書の中に原作と追加の部とを認めて、資料問題の検討に努力を拂つた學者は、ヘルシャー以後の獨乙に於ては、ヘルントリッヒ (Hertrich) を以て代表する事が出来る。彼は *Ezechielprobleme*, 1932 に於て、本書の各部に亘つて詳細な點にまで批評學的研究を爲した一例を擧ぐれば六章を一一七節、八一—一〇節、一一—一四節の三に區別し、第一の一—七を原作、八一—一〇を併因後期の追加、一一—一四を僞作と爲している。エゼキ

エルの活動した場所としては、一般に認められていたバビロニヤ説を否定し、ユダヤに於て、或部分は特にエルサレムに於て預言され且つ記述された事を明かにした。

其後英國と獨逸とに年を同じくしてエゼキエル講解が世に公にされて注目をひいた。Cooke, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Ezekiel*, I. C. C., 1936. Bertholet, *Hesekiel, Handbuch zum A. F.*, 1936 がそれである。クックはヘルシャーの書に影響されつつも可成保守的に流れている。但し散文體の部分と詩文體の箇處との問題に就いては「散文體の基底として詩文體の部分が存在する」(pp. xxiv—xxv) と兩部の密接な關係を認めているが、理論的に客觀的に充分な説明を缺いて居り、エゼキエル書に明記されている年代に對しては、之を無批判に受け容れて、「エゼキエルが、自己の爲した預言の言葉に對して、自ら年月日を附するのは當然である」(p. xix) と記している。

バートレットは先にクレッチマーが主張したところの、エゼキエル書が二つの校訂版から成つてゐるとの説を支持したが、其判別の原理としては、著者が第一人稱を以て現はされているか、第三人稱を以て表現されているかと云ふ皮相的な方法を排した。他面に於て、バートレッ

トはヘルントリツヒの研究の成果を取り容れ、預言者エゼキエルはパレスチナに於て活動を開始し、後にバビロニアに赴いたと説いたが、其根據として明示されているのは一二・三「他の處に移るべし」の句である。パートレットは一・一の「三十年」を訂正して十三年とし預言者エゼキエルが第一回俘囚以後十三年目（五八四年）にバビロニアに住むに至り、之を以て第一章が書き始められたと説く。パートレットは第二校訂版、即ち體を成せる他の追加的エゼキエル書を認めようとして、七十人譯に根據を置いてヘブル原典を大膽に訂正しているが、之は我田引水の方法であつて、特に第十三章に對して彼の下した結論は當を得たものと言ひ難い。

其後アメリカに於ける舊約學雜誌にエゼキエル書に關する論文は多數現はれたが、單行本としては William A. Irwin, *The Problem of Ezekiel*, Univ. of Chicago, 1942 は最も優れたものであらう。

アーウインはエゼキエル書を各書に亘つて原文批評學的に研究し、用語、聖書の他の書との比較、重複的記述の有無等に注意深き検討をした結果、預言者エゼキエルの原作と追加の部とを區別した。例として第六章に就いてのアーウインの見解を記せば、次の如くである。此の

章はヘルシャーに依つて“*theoretische Prosa*”として全部追加と斷定されたが、アーウインは之を一一七節、八一〇節、一一一四節に三分し、一一七の詩文的構造を検討して三Bを挿入、五Aは七十人譯に基いて同じく挿入とし、七Aを同様と認め、六節を不必要として削除している (p. 55)。斯くして出來上つた詩形は完全に近い形體を具備するに至つたが、之は餘りにアーウインの主觀が入り過ぎていゝのではあるまいか。併し乍らクックも五一七節を一一四節の重複とし、且レビ記二六・三〇、三一に基く追加としてゐる點に鑑み (U. C. C. p. 69)、アーウインが必ずしも獨斷的であつたと言ふ事は出來ない。更に八一〇節は、前に置かれてゐる一一四節とも、一三、一四節とも連絡し得ない句であり、アーウインは追加と認め、一一、一二節は原作とされるが、一三、一四節は追加と看做されてゐる（此の箇處はクックに依れば原作と認められてゐる）。アーウインが斯くして得た結論を綜合するとエゼキエル書四十八章中最後の九章（四〇—四八）を追加として取除くならば、一一三九章間は一〇—一三語より成つてゐて、其中二五一語のみが預言者エゼキエルの預言として認められる事と成つてゐる。（之をヘルシャーの一七〇語をのみ原作と認めた事に比較す

るならば、まだ寛大であると言はねばならない。さて斯くして追加を除外した後に書き出される預言者エゼキエルの姿は如何なるものと成るであらうか。

アウインはエゼキエルの活動開始を前六〇〇年となし、エルサレムの陥落（五八六年）と共にバビロンに連れ行かれ、彼地に於て預言の記録（原作）を完成したが、彼は凡そ五六〇年頃まで活動を続けた。今之を年代に配列するならば次の如くである。

A 六〇〇年頃に屬する預言

- ①一・一。三・一一。②三・一六一九。③二五・一一四。
④三五・一一三。
Bゼデキヤ治世の初期（五九七年直後）⑤一七・一一八、
一一。⑥一五・一一五。

Cゼデキヤ治世の中期

- ⑦一四・一一一三。⑧二二・二三、二四。⑨一四・一一三、
六。⑩一六・一一三。⑪二四・一一三、五、一一。⑫三三・
三〇—三三。⑬三四・一一二、
Dゼデキヤ治世後期、バビロニヤ軍侵入以前。
⑭二〇・一一三。⑮六・一一五。

Eバビロニヤ軍エルサレムに向つて進軍する頃

- ⑯二一・一一三、五。⑰二一・六八。⑱二一・一一一二。
⑲二一・一一三—二二。⑳二一・二三—二五。㉑二二・一一四。

エゼキエル書講解(1)

Fエルサレム包圍の初期

- ㉒二四・一一五、九一〇。㉓二二・一七一—一八。

Gエルサレム包圍の期間

- ㉔四・一一二、九一一。五・一一三。㉕八・一一。一一・二
一六。㉖二二・一七一—一九。㉗二六・一一二、七。㉘二七・
一一三、二五—二七。㉙二八・一一四。㉚二八・一一—一七。
Hエジプト、バビロニヤ軍のエルサレム包圍を中止せしむ
㉛二九・一一三、㉜三〇・一、六、一〇。㉝三〇・二〇—二
四。㉞三二・一一二。㉟三二・一七—二二。

I包圍の後期

- ㊱六・一一—二。㊲二四・一五—一六、一八—二二。㊳一
二・一一—一。

J包圍の終結

- ㊴一三・一一五。㊵七・一一〇。一一二—二二、二四、二六
—二七。

Kエルサレム陥落後

- ㊶一一・一四—一五、㊷三三・二三—二四、二七。

Lユダ王國崩壊後の初期

- ㊸三八・一一四。

M俘囚時代

- ㊹一八・一一四。㊺三三・一〇—一一。㊻三六・一六一—一八。
N俘囚時代後期

- ㊼三七・一五—一八、二二—二二。

〇エゼキエル活動後期

④二二・二一―二三。⑤二九・二七―一九。

P時期不定

⑥二二・二六―二八。⑦一三・一七―一九。⑧二八・二〇―

二二。⑨三一・一一―八。

アーウインの努力に依つて、兎も角も預言者エゼキエルの與えた預言として、確實に認められるものが、右の表の如く明確になつてゐる事は、有難い事である。之が妥當であるか否かは、各章節に於て批判しなければならぬ。

以上がエゼキエル書批判の歴史であるが、今日に於ては多くの學者の検討に依つて、論ぜられるべき重點は總べて論じ盡されたの觀を懐く。そしてクツク、アーウイン等に依つて、先づ解決の途が示されてゐる事は、大いなる助けとなる。

(序論の項、終リ)

(同志社大學神學部教授)

基督教研究

第二十四卷第二號(三月末刊行豫定)

眞理の證明……………茂 義太郎

波多野宗教哲學に就いて(完)……………濱 田 與 助

ロマ書一七の研究

―ケーリユグマを中心とせる―

……………小 田 實

アポクリファ概論(Ⅰ)……………E・S・カーブ

マタイ傳註解(Ⅱ)……………富 森 京 次

エゼキエル書講解(Ⅱ)……………山 崎 亨

其他

小論、サーウエー、新刊紹介